

第三節 女性と信仰

いま、沖永良部島の人々が使っている言葉のなかに、ときどき古代的なものがあることに、ハッとすることがある。それは、ある言葉がそのまま本土の古代の言葉であることもあるし、そうではないが、ある言葉がきわめて古代的考え方を示している場合と二通りある。

ここにとりあげる「ヲウナイ」という言葉も、後者の例である。ヲウナイとは、男の兄弟から女の姉妹を呼ぶときに用いるもので、それがときにヲウナイ神ともいわれるように、兄弟を守護する姉妹の霊を意味している。

永吉毅氏によると、沖之永良部島には、

あがる太陽^{テイダオウガ}拝^マでい 徳之島向こうてい ヲウナイ神
拝^マでい 吾島^{ウシマ}戻ら

越山ぬ頂上^{チジ}に 線香花立^{センカウハタテ}ていて ヲウナイ神拝^マでい
吾島^{ウシマ}戻ら

などの歌が伝承されているという。

これらの歌は、その結びが「吾島戻ら」となっているように、ヲウナイ神の加護によって、旅から無事帰ってくることを念じて歌われているものである。

しかし、いまでは島の人々も大部分の人が、ヲウナイ神のことをあまり知らないし、このような歌もほとんど忘れられてしまっている。

ヲウナイ神は、一般的には「オナリ神」といい、沖縄から奄美にかけて分布する信仰で、姉妹が兄弟に対して霊的に優越するという考え方にもとづいている。特にこの信仰がめだつのは兄弟が旅に出たり、戦争に行ったりするときに、それを守護するとされていることである。

沖縄や奄美では、旅に出るとなると船旅であったが、兄弟が旅に出るときには、姉妹がみずから織った布地・手拭い、あるいは姉妹の毛髪をもたせると、無事帰ってくると信じられていた。このようなオナリ神の信仰が、かつては沖永良部島でも生きていたはずである。

ところで、これまでに述べたオナリ神の信仰は、ほとんどの場合、一家内部で兄弟が姉妹の加護を受けるものであったが、古代社会ではそれが一族や共同体などに拡

大されて信仰されていたものと思われる。

八世紀の歴史を主に記録した「続日本紀」の七〇〇年（文武天皇四）六月の項に、ほぼ次のような記事がある。

薩摩比売・久売・波豆、衣評督衣君、助督衣君、弓自美、又肝衝難波、肥人等を従えて兵を持って覓国使刑部真木等を剽劫す。ここにおいて、筑紫惣領に勅して犯に准じて決罰せしむ。

この記事を理解するためには、話をさらに二年前にさかのぼらせねばならない。すなわち、六九八年の四月に、朝廷から南島へ、覓国使という国を設置するための調査団が派遣された。おそらく、南部九州から南島にかけての地域に新しい行政区画を立案するための諸資料を得るという目的をもって遣わされたものとみられる。一行は、文忌寸博士・刑部真木ら八人で、朝廷では出発前に武器を支給して万々に備えさせた。

ところが、予想どおり、一行は南部九州で調査を妨害されている。このあたりから、さきの「続日本紀」の記事である。その記事によると、妨害したのは薩摩比売・久売・波豆たちと、衣評督衣君らと肝衝難波らのメンバーであった。衣評というのはのちの薩摩国潁娃郡で

あり、評督とはその長官を指し、助督とは次官を指している。したがって、衣君と弓自美は潁娃地方の行政を担当した豪族といえよう。一方、肝衝難波は大隅国肝属郡の地域の豪族とみられる。彼らが一緒になって覓国使一行を剽劫、すなわちおびやかしたというのである。

衣君は薩摩半島の南部に割拠し、肝衝は大隅半島南部に割拠する豪族であつてみれば、領域を侵犯した覓国使を剽劫したのはその立地からしても当然の行動ともいえよう。

この一連の事件のなかで注目されるのは、薩摩比売

久売・波豆などの存在である。この人々は、その名前からして女性であろう。しかも、この記事のなかで筆頭にかかげられていることからすると、指導的役割を演じていたとみられる。豪族を従えて覓国使一行を剽劫したこれらの女性集団は、おそらくまじないに優れた巫女たちであつたと思われる。このような女性たちは、戦闘などに際してはその先頭に立ち、霊力を發揮して味方を勝利に導く役割を演じていたのであろう。さらによく知るために、沖縄の歌謡集「おもろさうし」を参考にとりあげてみたい。

「おもろさうし」の全二十二巻のうちの第一巻には、

王国時代の国王に対応する最高の神女、聞得大君がやはり戦闘に関与した歌謡がいくつも見出される。その二、三をとりあげてみよう。

聞得大君ぎや

初め軍 立ちよわちへ

合おて 行き遣り

敵 治めわちへ

(又) 鳴響む精高子が

[巻一、25]

聞得大君ぎや

赤の鎧 召しよわちへ

刀うちい

大国 鳴響みよわれ

(又) 鳴響む精高子が

[巻一、5]

聞得大君ぎや

押し遣たる精軍

按司添いしよ 世 添ぬれ

(又) 鳴響む精高子が

押し遣たる精軍

(又) あはれ愛し君南風

島討ち為ちへす 戻りよれ

(又) あはれ愛し君南風

国討ちへす 戻りよれ

〔巻一、35〕

これらを通釈すると、ほぼ次のようになる。

聞得大君が戦の先頭に立ち給いて、戦つて行つて、
敵(相手)を治め給いて、靈力豊かな人よ。

聞得大君が美しい鎧を身につけ給いて、刀をつけて、
国(天上まで) 鳴りとどろかせ給え、靈力豊かな人
よ。

聞得大君が遣わした靈力ある軍勢、按司を守護し、
世を守護し、靈力豊かな人よ、遣わした靈力ある軍
勢、あつぱれすぐれた君南風よ、国・島を平げて治
めてこそ、戻り給え。

以上であるが、君南風とは、聞得大君に直屬していた

久米島の最高神女で、初代の君南風は首里軍が八重山遠
征のとき(一五〇〇年)、従軍して呪力を發揮したこと
で名高い人物という。

この一連の「おもろさうし」の歌謡によると、沖繩で
は聞得大君あるいは君南風などの神女が存在し、戦争に
際してはみずから従軍し、その先頭に立ち、靈力を發揮
していたことを知ることができる。彼女らは、ただ戦闘
に参加するだけでなく、いつ戦うのがよいかという、
戦争の吉日まで選定したよう、次のような歌謡ものこ
されている。

精軍吉日 取りよわちへ

島討ちせぢ もちよろ

精百吉日 取りよわちへ

国討ちせぢ もちよろ

〔巻一、34〕

などともある。

「おもろさうし」二十二巻がすべて完成するのは尚豊

王の三年(一六二三)とのことであるが、ここにとりあ
げた第一巻の成立は、それより約九十年早い尚清王の五
年(一五三二)とされている。しかし、「おもろさうし」

の成立は後の時代であっても、そこに展開されている世
界はきわめて古代的である。

それでは、薩摩比売・久売・波豆や聞得大君・君南風
などの巫女あるいは神女が存在し、靈力を發揮するのは
南部九州と沖繩などに限定されるのであろうか。

そこですぐ思い浮かぶのは、「魏志倭人伝」にみえる
女王卑弥呼であろう。同書では、卑弥呼は「鬼道に事へ、
能く衆を惑わす」と記述されており、彼女には政治を
司る王としての一面とともに、巫女としての一面が
あつたことが認められる。

もう一つ思い出されるのは、ヤマトタケル伝説に出て
くる、ヤマトタケルの伯母は、ヤマトヒメである。ヤマト
タケルは、父景行天皇の命をうけて東方の荒ぶる神や服
従しない人々を討つたために出発したが、途中伊勢神宮で
伯母のヤマトヒメから草那芸劍と火打ち石とを賜わつ
た。そして、のち相模国で土地の豪族の計略で火攻めに
あつたとき、その劍と火打ち石によって難をまぬがれた

という。ヤマトヒメは、ここでは明らかにヤマトタケル
を守護する立場で描かれている。

このようにみえてくると、沖永良部島における「ヨウナ
イ」という言葉の、はるかなる由来が浮かびあがつてく
るのではあるまいか。オナリ神は、のちには沖繩や奄美
に限られる信仰となつているが、類似の信仰は、もとは
本土にも広く存在したものと考えられる。それが南部九
州では少し後まで残り、南島ではさらに後まで伝えられ
ていたとみられるようである。

沖永良部島の「ヨウナイ」という言葉は、きわめて古
代的信仰の名残とみることができるのではあるまいか。